



magical  
art life  
a collector's world

[第2回アートアセفال企画]

# マジカル・アート・ライフ展

## あるコレクターの世界

2006/9/9日→10/1日 トーキョーワンダーサイト渋谷

DATE: 2006/9/9(SAT.)-2006/10/1(SUN.) / VENUE: TOKYO WONDER SITE SHIBUYA

入場料: 無料 / 開館時間: 11:00~19:00 (入館は閉館の30分前まで) / 休館: 月曜日 (祝日の場合は翌日)

主催: トーキョーワンダーサイト / 企画: トーキョーワンダーサイト、アートアセفال

ADMISSION: FREE / OPEN HOURS: 11:00-19:00 (ENTRANCE AVAILABLE UNTIL 30 MINUTES BEFORE CLOSING TIME) /

CLOSED: MONDAY (TUESDAY IF THE MONDAY IS A PUBLIC HOLIDAY) / ORGANIZED BY TOKYO WONDER SITE / CURATED BY TOKYO WONDER SITE, ART ACEFALE

●オープニングレセプション: 9月8日(金) 19:00~(となたでもご参加いただけます)

●OPENING RECEPTION: 2006/9/8(FRI) 19:00-(OPEN TO THE PUBLIC)

今私達が生きている社会は決して良い状況とは言えない。テロルの脅威、人々の希望の喪失や想像力の衰弱化およびそれらに端を発するさまざまな奇怪な事件の連鎖などなど、挙げればきりが無い。このような状況のなかで、アートはどうあるべきなのか(アートそれ自体の問題)、アートが果たすべき役割は何なのか(アートと社会との関係の問題)を真面目に考えなければならない時期が来ているように思われる。これらの問いの答えはそう簡単に見出せるものではない。しかしたとえその答えが見つからなくても、ただ指を喚びて見ているだけではいけないだろう。大切なことは、考え、そして実践して行く「行為」そのものにあると思われる。

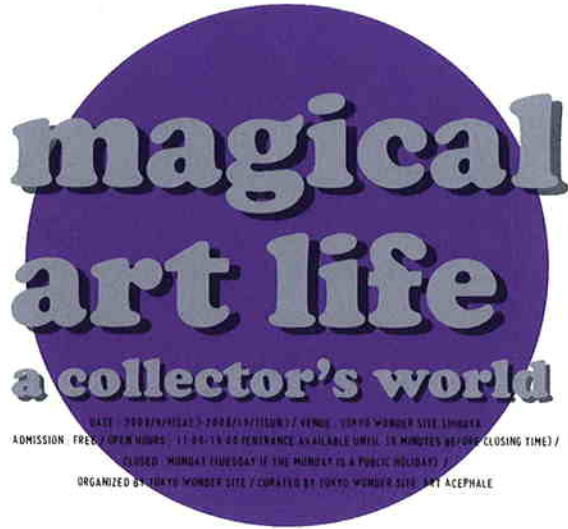
アートアセファルは、現在のアートの状況を「アートが商業的消費によって瀕死の状態にさせられた時代」ととらえ、若いギャラリストやアーティストらが不特定に複数参加し、実践的に展覧会を企画、運営するなかでその大きな問題を考へて行く集団である。命名の由来はフランスの思想家バタイユが組織した秘密結社「アセファル」から借用したもので、無頭人という意味。頭からの抑圧を解かれて自由に躍動している生命を表している。

Art Production Team "Art Acephale"

It would be false to say that we are living in a good world with a positive society. The constant threat of terrorism, and the chain of alarming incidents triggered by people's loss of hope and imagination are just the tip of the iceberg. It is a time to focus seriously on the question how art, against this backdrop, is supposed to be (concerning the quality of art itself), and what it is supposed to do (concerning its relationship with society). To find answers on these questions is a rather difficult task, however this shouldn't be a reason to just sit there and watch passively. First and foremost, what is important is to think, and to take whatever action.

Art Acephale is a group of people who observe the present state of art in an "age in which art is being strangled to death by commercial consumption", and explore the above issues through the practical organization and administration of exhibitions with an unspecified number of young gallery owners and artists. The name "Acephale" was borrowed from French philosopher Georges Bataille's secret society of the same name, meaning "headless", which symbolizes the idea of life that is free and independent from restrictions by the brain.

今年6月に開催された「ある青年のドーイングの軌跡」展は、人はなぜ絵画を描くのかという根源的な問いを投げかけました。続く今回は、精神科医で、アートアセファル代表でもある岡田聡氏のコレクション展を開催します。近年注目を集めつつあるアーティストからまだ無名に近いアーティストまで、若手アーティストの作品を中心に集められた作品が、コレクターの胃袋の中でどのように消化されているのか。コレクションの展示によってコレクターのイメージする感性の世界を独特な展示によって表現します。現代アートの在り方に一石を投じる試みです。



自明なことであるが、作家によって美術作品は世界に向かって産み出され、やがてその多くは作家の手を離れギャラリーへと旅立つ。ギャラリーでは、作家の新作展と称してその作品はある期間オートマティックに私達の目に晒され、極一部の幸運の栄誉? (美術専門家のお墨付きをもらって)にあずかることができた作品のみ美術館という神殿に奉納されるが、その他の多くはギャラリーを通してコレクターの元へと運ばれる。言ってみればこの無限運動が、商業美術界そのものである。それぞれのコレクターは、それぞれのレイヤーで一定のカタルシスを得てその行為への自己確信を深め、この無限運動を加速させる。さて、この時代(歴史が終焉し、グローバルな高度資本主義が世界を被いつくし、もはや超越的の外部がなくなってしまうと喧伝されている時代)この無限運動は今この社会にとっていかなる意味を持つ(持たない)のだろうか? はたして美術作品は想像力を鍛える場を提供し得ているのか? そしてコレクターはその試練に対して真摯に挑んでいるのか? 本展は、あるコレクターの無数のコレクションを通じて、この問いについて考えようとする試みである。

アートアセファル代表◎岡田 聡

プレコンサート・サロン

「田崎悦子のやむなき冒険」その①  
バロックより古典へ

田崎悦子の2年にわたる文化会館での6回シリーズ「田崎悦子ピアノ大全集」各回の事前にトーキョーワンダーサイト渋谷にてプレコンサート・サロンを開催します。作曲家ジョン・ケージからショルティまで、様々な幅広い出会いを音楽表現のエネルギーとして消化し表現してきた田崎悦子が多彩なゲストを迎えます。第1回目のゲストは「人間とは何か」という問いからアートを見つめる精神科医・アートアセファル代表の岡田聡氏と、様々な音楽シーンを独特な視点で見守ってきた池田卓夫氏です。

ゲスト: 岡田聡(アートアセファル代表) / 池田卓夫(日本経済新聞社 編集局 文化部)

日時: 06/19/24 (日) 15:00 ~

料金: ¥1,000

会場・問い合わせ先

トーキョーワンダーサイト渋谷

岡田 聡 | おかだ・さとし

精神科医、現代美術コレクター。

心療内科クリニックで日々診療をおこなうなか、現代社会(合理主義社会=啓蒙的近代社会)、すなわちすべてを表象的な理解によってあからさまにし、均質化、相対化してしまおうと、欲望する世界に生きる人々の希望の喪失や想像力の衰弱ぶりを目の当たりにし、脱塵俗化して行く世界に対するささやかな抵抗として数年前より「魔術的芸術展」と称して毎年企画展を開催。現在は、六本木アート bar TRAUMARIS、アートプロデュース集団アートアセファル、清澄白河MAGIC ROOM?、六本木magical art room(<http://www.magical-artroom.com>)、アートコミュニケーションサイトLOAPS(<http://www.loaps.com>)などを通じて、展覧会のキュレーションや各種イベントの企画などを行っている。現在季刊誌ラムフロマー・ツェッテルズ・トラウムにて「魔術的アートライフのすすめ」を連載中。

Art Acephale Representative's Profile

Satoshi Okada

Psychiatrist and collector of contemporary art. While practicing daily at a psychosomatic clinic, for several years he has been putting together annual "magical art exhibitions" to oppose the gradually demystifying, rationalist society that desires to interpret, homogenize, and put everything into perspective through merely superficial understanding, and as a result is being deprived of hope and imagination. Okada curates exhibitions and various other events in cooperation with art bar "Traumaris" in Roppongi, art production team "Art Acephale", "Magic Room?" in Kiyosumi Shirakawa, "magical art room" (<http://www.magical-artroom.com>) in Roppongi, art communication site "LOAPS" (<http://www.loaps.com>), and others. Presently gives "advices for a magical art life" in a regular column in the quarterly publication "lammfrommer zettel's traum".